

〔島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要 Vol. 53 163～168 (2015)〕

「海外語学研修」に関する評価結果および 自由記述、レポートの分析

小 玉 容 子
(総合文化学科)

Analysis of the Evaluation Results and Reports by the Participants of Study Abroad Program

Yoko KODAMA

キーワード：海外研修、評価、活動、自由記述、レポート
study abroad, evaluation, activities, free comments, reports

1. はじめに

島根県立大学短期大学部は、前身である島根県立島根女子短期大学が1990年にアメリカ、ワシントン州エレンズバーグ市にあるセントラルワシントン大学 (Central Washington University、以下CWU) と交流協定を結び、2014年度で25年目を迎えた。交流内容は様々な形での教職員・学生の交流だが、本学学生が参加するCWUでの「海外語学研修 (サマー・プログラム)」 (通称：サマプロ、以下通称を用いる) は、協定締結2年目から継続している長寿プログラムである。サマプロの歴史を含め、交流内容に関しては、2014年度刊行予定の「交流25周年記念誌 (仮称)」にまとめられることになっている。本稿では、事前研修を含めサマプロを一層充実させるために、平成26年度実施のプログラム全体に関するアンケート調査の結果およびレポートを分析し、学生の興味、関心、学びなどの状況、傾向を明らかにしたい。

レポートは帰国およそ一ヵ月後の9月28日 (日) を提出締め切り日として、サマプロを振り返っての気づき、自分がどのようなことを学んだか、その学び

を今後はどう生かすか、などに関してA4の所定書式2ページの長さで提出を課した。また、サマプロの活動内容検討のための研究ノートで学生レポートを利用することに関しては、参加者より了解を得ている。

一方アンケートに関しては、9月30日 (火) の解団式 (サマプロの締めくくりとして参加者全員が集まり、活動全体の振り返り、研修での体験シェアリングなどを行う) の時、アンケート内容および実施について説明した。個々の活動に対する満足度を知り、プログラム全体の改善に役立てること、そして結果を論文で用いることなどを説明し、10月6日 (月) までにメールで回答を返信するように依頼した。レポートに関しては、名前を付して日誌や写真などと共に研修レポート集として発表することなどを説明した。アンケートのメールでの回答に関する異論はなく、回収率は100%だった。

アンケートは日程順にそれぞれの活動について5段階評価をし、その理由の説明やコメントなどを求めた。評価基準は次の通りである。

- 5 - Really enjoyed it
- 4 - Enjoyed it
- 3 - So-so
- 2 - Didn't enjoy it
- 1 - Didn't enjoy at all

学生は評価理由などの記述部分も全てに答えていたが、記述の分量は平均して課題レポートの半分程度であった。

手順として、まず、アンケートの「授業」に関する自由記述から、学生が英語での授業をどのように受け止めたかを調べる。次に、授業以外の活動の評価結果と評価理由、感想などから、種々の活動に関して学生がどのような興味・関心を示しているかを調べる。また、Microsoft Wordの検索機能を用いてレポートとアンケートの記述部分における頻出語を調べ、それらの語から、文化体験活動に対する学生の持つイメージをつかむ。同時に、行動内容を表す語、情意を表す語などの使用回数、使われ方を調べ、代表的な感想などを把握していく。

2. プログラム内容および学生の評価と評価理由

2014年度のサマプロは、8月6日(水)に日本を出発し、現地時間の同日エレンズバーク着。8月22日(金)お別れの晩餐会、23日(土)早朝エレンズバーク発、シアトル観光、シアトル泊。24日(日)シアトル発、25日(月)帰国の20日間のプログラムだった。平日の午前中は、2グループに分かれて「英語(Language)」と「文化(Culture)」の授業を受講し、午後と週末は様々な文化体験プログラムに参加した。プログラムの内容は、馬車での市内巡り(美術館含む)、保育園訪問、アメリカ人学生との英会話活動、朝市めぐり、地域の人たちとの交流、MLB野球観戦、風力・太陽光発電施設訪問、化石の森公園訪問、バーベキュー体験、学長宅訪問、ドイツ村観光、乗馬体験、カスケード山脈の最高峰であるレーニア山観光、日曜日の教会体験、農場見学、企業訪問(牧草会社)、Talk Time交流会、ネイティブアメリカン博物館など訪問、ヤキマ川下り、お別れ晩餐会などである。最終日はシアトル市内を観光した。

以下、1)では授業に関して、2)では個々の活

動に関して、評価やコメント、レポートなどをもとに学生の感想、受け止め方などを分析していく。

1) 授業に関する評価およびコメントなど

コメントの特徴的な語や表現などから、学生の様子を推察する。最初は、「授業」と「不安」、「難しい」、「戸惑う」など負の評価、感情を表す語を結び付けていたが、「日が経つにつれて」、「知らないこと(新しいこと)」、「役立つこと(実用的なこと)」を学び、「わくわく」、「楽し」く、「積極」的に授業を受けた様子がうかがわれる。

午前の授業の中で午後の活動に関して学ぶことで、午後の活動の理解が深まり、また、授業外の様々な場面での文化観察を授業で発表しクラス全員で共有するなど、授業と授業外の活動や生活が有機的に結びつき、自分たちが有効に学んでいると実感したようだ。「お金の使い方」や様々な場面で使える表現などを学び、その言葉・表現などを、実際に生活の中で使ったという経験が、学習意欲を高め、プラスの効果を生んでいった。その他、「文化」の授業ではアメリカ(西部)の歴史や文化などを、それらが息づいている環境の中で学ぶことで、知ることの意味、必要性を理解したようだ。

「授業で分かるようになっていく言葉や、使えるようになる言葉が増えていって成長を感じられて嬉しかったです。」「英語を学んでいく上でまだまだ知らないことがたくさんあるということを実感できてこれからの学習の意欲につながりました。」「役に立つ表現をもっと授業で習いたかった。」「授業外で1時間英語を友達と話すということで英語を普段から使えるようになっていました。」このように、短期の研修ではあっても、授業と生活を通して英語実践力が向上したことを実感し、学習意欲も一層高まったという貴重な語学学習体験だったことがわかる。

2) 個々のプログラムに関する評価およびコメントなど

(1) 「乗馬体験」と「レーニア山観光」

全員が「5」の評価をつけたのは「乗馬体験」と「レーニア山観光」だった。これら二つの活動は、

学生にとって何かと比較をすることができない体験で、様々なレベルで心が動かされたようだ。乗馬体験は初めてで「不安」で「怖かった」が、すぐに慣れ、「自然」の中、山道を行く「乗馬」と、道中の「景色」を「楽しんだ」。加えて、乗馬した馬に対して、‘I love my horse.’、‘My horse was so cute.’ ‘My horse was very clever.’、「馬を好きになった」、「馬が愛らしかった」などとコメントしているように、「馬」とのふれあいを楽しんだ様子がうかがえる。「レーニア山観光」では、ほぼ全員が、想像を絶する「美しさ」に「感動」した。「Beautiful! Awesome! 景色がきれい、言葉を失うほど感動、生涯忘れられない思い出、美しかった、驚いた」などの言葉が並んでいた。また「万年雪」での季節はずれの雪合戦を楽しんだり、野生の動物たちと出会ったりなど、日本ではできない体験が五感に強く訴えたことがわかる。

(2)「アメリカ人学生との英会話活動」、「朝市めぐり」、「地域の人たちとの交流活動」、「野球観戦」、「農場見学」、「ヤキマ川下り」、「お別れ会」、「シアトル観光」

(2)の活動もほぼ「5」に近い評価（例えば一人が「4」評価）を得たものが多かった。これらの活動のように、現地の人たちとの交流活動を中心に、アメリカに行ったからこそできた体験は好評だった。表1は、「英会話活動」以下の8項目に関して、好意的な評価を表す語が用いられた回数を、レポートとアンケートの記述の中でカウントしたものである。「楽しかった」が主なキーワードであることが分かる。例えば「楽しい」の出現する回数はレポートとアンケートでそれぞれ19回と17回だが、「(楽し)」として語幹のみの検索をすると、76回と199回となる。このように、検索語を一部変えたり、漢字

だけでなく、ひらがなでも検索した場合は（ ）内に示し、回数も同様に（ ）内に示している。

その他、(2)の項目では、体験が心情面に与えた刺激が高かったことが表2の感動を表す語の出現回数から推測できる。

表2 (2)の活動に関して、感動を表す語の使用回数

検索語	感動 (興奮)	すごく	驚く (驚い)	驚き (驚)
レポート	4(2)	19	7(19)	21(46)
アンケート	16(4)	36	1(26)	16(43)

(3)「学長宅訪問」

例年実施している「学長宅訪問」の評価も、予想以上に高かった。比較的動きが少なく、応対して頂く人数も限られているが、学長との個別の会話など、学生にとって緊張をする一時でもあった。コメントでは、今年新たに取り入れたプレゼンテーションに関するものが多かった。学生が四つのグループに分かれ、島根（松江）の観光、文化、大学の紹介など、テーマ別に紹介するプレゼンテーションを用意していき、学長宅で発表した。これは、もう一つの海外研修である「海外企業研修」で実施している学生の事前準備にない取り入れた活動である。

「プレゼンテーション」の語は、レポートでは3回、アンケートでは15回使用されていた。「貴重な」、「precious (good)」な「経験」として、ほとんどの学生が「緊張」という言葉とともにコメントしていた。グループで「協力」して準備、練習をして臨んだ点、英語での発表が「できた」「成功した」と思えた点で、ほかの活動とは異なる達成感を感じることができたと考えられる。CWU学長ほか皆さんが「うなずきながら聞いてくれた」ことに感動していた学生もいた。

表1 (2)の活動に関して、好意的評価語の使用回数

検索語	楽しい (楽し)	楽しかった	嬉しい	良かった (よかった)	良い (良)	面白 (おもしろ) かった	面白 (おもしろ)
レポート	19(76)	18	16	11(19)	24(51)	9	15(5)
アンケート	17(199)	126	11	33(124)	19(65)	19	15(10)

(4)「風力・太陽光発電施設訪問」と「企業訪問(牧草製造販売)」

これら二つの活動に関しては、特徴的な評価が示された。両方の訪問先で、「土地の広さ」が学生にとっての驚きであり、施設、設備などを間近で見たため、「大きさ」を実感した場所であった。表3に示したような、規模の違いを表す特徴的な語などが使われる頻度の高い活動でもあった。「研修だから行けた場所」であり「貴重な体験」だったと多くの学生がコメントしていた。小さな国土の日本との違いも実感したようだ。

表3 規模の違いを表す語を含む異文化体験を表す語の使用回数

検索語	大き	いろんな (いっぱい)	貴重な	初めて	違	異 (文化)
レポート	53	8(2)	19	23	137	31(16)
アンケート	37	10(8)	15	35	58	4(0)

上述のような感動体験とは別のコメントとして、「風力発電所」の場合、「説明が早すぎて分からなかった」、「説明が難しすぎた」など、英語が理解できなかった点で評価を下げた学生もいた。一方で「授業で説明を聞いていた」ので「なんとなく分かった」学生もいて、事前に基本情報を理解しておくことの大切さを示していた。

「企業訪問」でも、工場の広さや規模に「圧倒」され、「牧草」を殺菌したり、束ねたりという、工場での作業を見ることができて「興味深く」「よかった」としていた。牧草は、日本を始め多くのアジアの国々に輸出されていること、先輩が当該企業で働いていることなど、自分たちとの繋がりがあった点も、関心が持てた点だっただろう。しかし、「時間が短すぎた」、「暑かった」などの理由で「3」と評価した学生もいた。感覚的な部分で、学生にとってマイナスイメージが働くのは仕方がないことではある。しかし、ここでも、事前学習である程度情報が得られていれば、その情報の確認体験として、実際の体験が生かされるのではないかと考えられる。今後の事前研修にどれほどの情報を盛り込むべきかの参考となるコメントだった。

(5)「Talk Time 交流会」

「企業訪問」でお世話になった本学卒業生の浦林・ウォルシュ・桂子さんを始め、海外からの人たちも含め多くの人の参加があった「交流会」で、学生は英語の授業や英語での体験から学ぶこととは別に、様々な思いを持ったようだ。特に自分たちの先輩が海外で立派に仕事をしている姿を見て、また彼女の話聞いて、多くの学生が「貴重な時間」だったとコメントしていた。「将来について考えるきっかけになった」学生もいた。「桂子さんの話が聞けてよかった」、「同じ日本人が、アメリカで立派に働いていて、その本人から話を聞いて素直にすごいと思った」、「英語を勉強する励みになった」、「もっと一生懸命勉強しようと思った」、「自分も一生懸命やれば何でもできると、自分に言い聞かせて、何でも頑張れる気がした」など、積極的な姿勢で勉強に取り組もうという思いを強くした学生が大勢いた。

(6)「バーベキュー体験」、「教会体験」、「家庭訪問」

これらの活動では、学生の表情が眼に浮かぶようなコメントが多かった。次のコメントは、研修が始まり1週間ほど経った12日の夕食の「バーベキュー」に関してである。‘I was surprised because it was not barbecue!’、‘I was surprised because barbecue was hamburger!’、「想像していたバーベキューとは違って残念だったけど、おいしかった」、「日本のBBQだと思っていたのに、パンとソーセージとハンバーガーが出てきたのには驚いた。みんな動揺していた。これには食文化の違いを感じた。」学生は、「所変われば品変わる」を体験したが、食に関することは特に印象深かったようだ。

その他にも、学生の常識・知識が違っていた体験として「日曜日の教会」にも驚いたようだ。「想像していた教会とはまったく違って、とても驚きました」、「みんなでバンドが演奏する音楽に合わせて歌ったりしていた」、「静かな雰囲気ではなくライブのような感覚でお祈りが進んでいくのには驚いた。」「歌に感動して、涙が出そうになった」学生もいた。

また、訪問した家の「広さ」にも驚いたようだ。「広」

の語は、レポートでもアンケートでそれぞれ25回、24回使われていた。表2の「驚き」のような感動を表す語は、表3の「初めて」の「貴重な」体験と組み合わせられ、学生が「日本」と「アメリカ」の「違い」を肯定的に受け止めていることが分かる。その他の規模との関連語としては、「大きい」、「いろんな」などが高い頻度で用いられていた。

(7)「シアトル観光」

最終日のシアトルでの一日は、「自由時間がたっぷり」あり、「買い物もたくさんでき」、「おいしいものも食べ」、「最後に良い思い出」となる特別な一日であった。

買い物は多くの学生の関心の的であり、アメリカならではのものにも出会える機会でもある。エレンズバーグでの「朝市」(Farmers' Market)でも、「日本でお祭りに行けなかったので、テンションが上が」り、「見ていだけでも楽しい」体験を学生たちはした。そして、最後の一日をシアトルで自由に過ごし、観光をしたり、エレンズバーグとは違う大都会のお店での買い物を楽しんだりして、「happy」で満足な、研修の締めくくりにふさわしい一日を送ることができたようだ。表4のように、「買い物」、「食事」などの語は、主としてシアトルの一日に集中しており、学生の楽しんだ様子が如実に表れている。

表4 買い物、食事などに関する語の使用回数

検索語	買 (う／い物)	食べ (食事)	おいしい	店
レポ ー ト	17(3/10)	50(21)	11	20
アンケート	14(2/14)	24(4)	22	22

3. まとめ

レポートで特に頻度の高い単語は、「英語」、「アメリカ」、「日本」、「文化」、「授業」、そして「自分」である。これまでは特定のプログラムに合わせて頻出語、特徴的な語を取り上げたが、表5の単語は、「海外語学研修」全般にわたり用いられた頻度の高い語に関する使用回数であり、研修の全体像の特徴を如実に表している。

この結果から、これらの語をつなぎ、先に紹介した情意を表す語を入れていくと、「英語を学び、文化を体験するために、アメリカに行き、自分が知らなかった、日本との違いを様々な驚きをもって体験的に知ることができた」、「多くの人たちと英語で話し、買い物をし、貴重な体験をして」、将来のことを考え、「英語の勉強」にいつそう前向きになることができた、というサマプロ参加学生の姿が見えてくる。

日本での教室で行われる英語授業は、外国人教師の授業であっても結局授業時間内で完結しがちである。現地での研修は、教室での学びとフィールドでの学びが一体化し、学生の学びのレベルを引き上げていることが分かる。単なる観光体験に止まらず、様々なアメリカの側面を体験できるプログラムを取り入れることで、活動の質のみならず授業の学びの質も相乗的に向上するようだ。

今回のアンケートやレポートで得た結果は、ほぼ全てにおいて好評で、好意的な感想、レポートであった。しかし、この結果で事足りたとせず、例えば今年度の新しく取り入れた活動である「プレゼンテーション」で学生の活動の幅が広がったように、工夫や検討の余地は残っていると考える。新たな取り組みの可能性もあるだろうし、現在の取り組み

表5 研修全体にわたり出現頻度が高い語の使用回数

検索語	英語	アメリカ	日本	日本語 (人／食)	文化	授業(研修)	経験(体験)	自分
レポ ー ト	273	313	252	35(17/3)	118	112(85)	38(59)	182
アンケート	62	91	76	2(6/0)	23	49(9)	24(50)	37

に一層の工夫を加えていく方向もあるだろう。いずれにせよ、今後も参加学生が満足感、達成感、自分に対する肯定的な思いを持つことができる研修を続けられるように、そして、帰国後も研修の成果が発展的意味を持ち続けることができるようにしていくことが重要である。

参考文献

飯塚雄一、ケイン エレナ、小玉容子、松本玄智江
「テキストマイニングによる短期語学研修の自由
記述の分析」『総合政策論叢』第17号(2009年3月)、
島根県立大学 総合政策学会.

(受稿 平成26年12月8日, 受理 平成26年12月15日)